

モップ

—捨てられていた老犬—

甲田正二郎著・嶋田正文編

< 1 >

ひよんなことから八カ月間だけ我が家の一員となり、日々を共に過ごしたけれど、あいにくその素性も年齢もまったく不詳であった、一匹の老犬との思い出話に、これから暫らくの間、つきあっていただけたら幸いです。

先ず、私自身のことにとちょっと触れておきましょう。

すでに五十路を迎えており、我が家の一男一女の逞しい成長ぶりを横目で見ながら愛しむ者です。かくいう私の趣味は、しょっちゅう家内に見咎められつつ中古カメラ、特にライカを漁るのが一番の喜びです。

そして、生業は東京下町の医者でして、映画の寅さんでおなじみの江戸川堤からほど近い、葛飾区は鎌倉の一隅に、内科・小児科・在宅医療などの看板を掲げています。

昨年十一月中旬の日曜日のことです。

当時、我が医院はまだ日曜・祝祭日は休診の慣例でしたが、されど一旦、憂患の訪い来れば、そうも言ってはいられず、当日は午前中に胃透視の予約が五名ばかり入っていた。

ベテランナース長の適切な補佐のおかげで内視鏡検査は順調に進み、最後の患者さんが診察台を下りたのは十一時過ぎだった。

私自身はカルテを書き終えて、心地よい労働のあとのこころよい疲労感にやれやれと一息ついたその途端、医院の電話が鳴った。

そそくさと出たら、意外に、家内の携帯から私への緊急連絡だった。と言っても、その家内はついさっき、久しぶりに大学時代の友人と会うとかで近くの京成高砂駅へと自転車で向かったばかりである。

電話は、「すぐに来られない？動けないらしい犬が此処に一匹いるの。あなたが来るまであたし、ここで見張っているから何とかしてあげて」

この要請の発信場所は、我が家から徒歩でも数分の所にある高砂北公園からだった。

なるほど、いかにも彼女らしい端折った短い連絡だから、当然、私には前後の事情がよく分からなかったが、しかし、いつも新たな任務を夫に与えたがる奥様の毎度せつかな依頼である。で、勿論、断れはしない。

< 2 >

私はそくぎに電話口で、「じゃあ今から行くから、そこで少し待っていなさい」と、常に妻に理解ある夫らしく優しく応じた。で、今にして思えば、これがモップと我が家との縁の始まりだった。

私は立ち上がり、やれやれ今度のお役目は、休日往診の動物医の番かしらと思ひ、妻のもとへさっそく出向こうとしたら、その気配を察知した我が家の犬たちが散歩をねだってワンワン吠えてた。

ミニチュアダックス二匹とビーグル犬一頭、それと同じ程の大きさの雑種がもう一頭だ。ちなみに彼等の散歩は、二匹ずつ二組に分けて私が毎日、朝夕に行なうのが日常である。

が、今は、「定例の散歩時間じゃないぞ」そう言い聞かせると犬たちはちゃんと弁えて黙った。犬は私をもぐもぐであっても、まっすぐ言って聞かせれば、以心伝心、ちゃんとこちらの言葉を理解するのである。

今日の戸外は、空気がカラッと乾き初冬を思わせる、天へ抜けるような青空だった。私は家内がいるはずの現場へ小走りに向かう。

すぐにやや前方から、上りの京成電車が高砂駅へ進入する際にその手前の大きなカーブでブレーキを利かす時の、ゆるやかでのんびりした高い軋み音が、高砂北公園の木立越しに響いてきた。言ってみれば、この毎日聞き慣れたレールの音響の高低にも、近隣の住民は、風向きや季節の変化を知ることが出来る。それは生活の一部でもありました。

狭いながら高砂北公園はちょうど今、色鮮やかな赤と黄のグレードに色づいた木々の葉が、あちこち一面に散り敷く彩秋であった。

この公園の敷地半分をうっそうとした木々が占め、地面は、はっとするばかり目の覚める紅葉で染められている、その一方、反射でかがやく陽光に砂の白く照るグラウンドでは、恒例のゲートボールが済んだお年寄りたちが三々五々、家路につくところだった。みなさん下町らしい近所の住人なのである。

すると園内の一角に、自転車を停めて立っている家内の姿が見えた。彼女がいたのは公園に隣接する高砂団地のそばだった。

家内は傍らを指さして私のほうに見せ、それから軽く私へうなずき、そして一切何の説明もせず、背中を向けるや即座にペダルを蹴ってグラウンドを突っ切り、高砂駅の方へ行ってしまった。走り去るその速さを、私は啞然と見送るほかなかった。

< 3 >

「夫を電話で呼びつけておいて、その態度は何です」と、軽い小言をいう暇もなかった。たぶん家内は旧友との会合時刻が迫っていたのだ。

で、その現場には、やたらに紙屑を嗅ぐ犬一匹と、当惑顔の私が取り残されたという訳です。

改めて初対面の相手を見ると、これが又ひどいと言うしかないような有り様のムク犬だった。私を知る限りでは最悪のよれよれ姿である。

一目で、その尻尾ふきんの腰骨が極端に尖って見えたほどに痩せ細り、そして肋骨が脇腹にごつごつ浮き出ている。全体が見るからに精気のない、貧弱な体格であり、なぜか頭部のみが分不相応に大きい。不格好とも思えた。

よく見れば、体高はラブラドル（中型犬）ほどだが、足もとがヨロヨロふらついているのは恐らく過度の衰弱のせいだった。しかも、後肢に怪我をしているらしい。両足のすね毛が、部分的に黒ずんで濡れ、まだ固まらぬ鮮血が、足の毛の隙間からじくじく滲んでいた。黒ずんだ傷口だが、体毛がもじやもじや長くてその下に隠れ、どんな状態かはよく見えない。

怪我の原因を思いつかなかったが、どうやら腐敗や骨折は無さそうだった。

当の野良犬とはといえば、私の接近をやや気にしながらもその一方、風にふかれて転がっている菓子空袋などを虚しくクンクン嗅いでいた。

見るからによほど空腹らしい様子だが、しゃにむに雑草でも噛まぬ限り、清潔なこの近辺にむだな餌が落ちているはずもない。

私はこぶしで顎を撫でどうしたものかと思案、しばし野良犬を観察した。

犬は全体に汚れきってくすみ、見栄えが悪く、ぼさぼさの房毛にはまるで艶が無い。そして絶えず周囲の小さな物音に怯えており、ちょっとした瞬間にもビクッと四肢をすくめる。信じられないほど、みじめな姿だ。

長い尻尾をおもたげに力無く垂れて、いわばボロキレ同然のありさまは、つまりこの犬にとって信頼に足る主人が傍らに居ないためだ。眼前の犬の放浪生活の長いことを思わせた。

どうも捨て犬くさかったが、一瞬、毛の下に色褪せた首輪が見えた。

その首輪に迷子の連絡先標示があるかと期待して覗きみた。文字や数字は何も無かった。だが、一度難儀を見てしまっただけならこのまま放つもおけまい。

悄然としたその犬の姿は元々気の荒そうな印象ではなかった。

< 4 >

この犬がいったい何処へ行くつもりだったのか私には解らない。きっと犬自身にも解らない筈だ、仕方がない、一先ず我が家へ連れ帰ることにした。

私は前こごみの観察姿勢からうなずき、ひとつ伸びをし腰に手を当てて、考えた。無駄に手を噛まれてもつまらないな、と。

それで、さっそくズボンのベルトを抜いて大きめに丸く輪を作り、それから試しに、正面からゆっくり近づくと、察したのか犬は後しきった。見れば、そ

の鼻面にきつい皺を立て、かすれた低い唸り声をあげている。

犬にとって見知らぬ人間の接近は恐るべき脅威だから少しづつ距離を保とうとする。

これは独立した生き物の健全な反応である。

更に、自負心らしい威嚇として犬は、口の両脇をブルブル波打たせて、大きな鋭い歯並びを覗かせた。たしかに、この犬の見かけはお話にならない酷いザマだ、しかし、個としてのプライドをいまだ保っているのだった。

私には、その折、この犬の下顎の歯が何本か抜けており、歯並びを欠いた隙間の様子も見てとれた。見かけの印象どおり、これが若い盛りをとっくに過ぎた、相当の老犬だと知れた。

そんな犬をむだに脅かさぬようにと私は、「よし、よし、大丈夫だぞ」と低く声を掛けながら、自分からその場に身を低く屈めてしゃがんだ。

すると、相手の犬が私のとった姿勢を訝りながらも、全くの敵対者ではないと判断したらしいのが解った。これは私の直観である。

だから私はそのまま両手をそろそろと伸ばしてベルトを前方へ近づけ、そっと、頭ごしにこの痩せ犬の頸へ輪を絡め、それから怖がらせぬよう徐々に上へ絞っていき、犬の引き紐とした。結果は、案外うまくいった。

体力の衰弱したこの犬は、一応この場は観念して、新たな首輪を受け入れたのだ。人に逆らって吠え付くとか、手に噛みつこうとする荒っぽい行動には出なかった。

衰れにも犬の心情としてはその小さい頃から、首輪や引き綱に慣らされているので、言ってみれば、違和感を覚えなかったのかもしれない。

私がスタートの合図に、ベルトを弱めにゆっくり引っ張ってやると、老犬は厭がりもせず、ただし喉笛でぜいぜい荒い息を立てながら、うしろからヨタヨタと歩き始め、ゆっくり、そのまま我が家までついてきた。

うん、案外、素直そうな犬である。

< 5 >

さて当面どうしようかと思った。

まずは何処かに犬を固定しなければならない。我が医院の正面玄関で、老犬の首輪に、新たな引き紐を用意して繋ぎ直した。

その紐の先を、とりあえずその辺の生け垣に結んだ。他には、今すぐこの犬のために使える置き場所が無いのだ。というのも、我が家には先に挙げたとおり、犬四匹がいて、ご存知でしょうが、犬族ときたら同類の秩序の維持については特別にデリケートな神経の持ち主たちだ。

いくら飼い犬といっても、太古から彼らが引き継いでいる原始のまま潜む本

能までは人間が左右できない。犬が本来備えている掟は、犬たち自身の判断に任せるしかないのだ。

中庭の犬舎には先住組の二頭がいて、早くも新参者の接近を嗅ぎ当てて吠え出した。それも一緒に遊ぼうという好意を含んだ甘え声ではなく、やたらと激しくこの侵入者を呪うような響きだ。いま、三者を一緒にしたら結果は良くないはずだ。

目の前の老犬は四肢で立っているのもひどくたるそうである。他の犬の脅し声など聞きたくないのか、やがて疲れきった様子でぺたりと尻を落として総身を崩し、地面に背を丸めた。

私が眺め下ろしていても一向動かず、外見はボロ雑巾同然。えらいものを拾ってきたと、いささか後悔した。但し、感心にもこの犬は新たな境遇を恐れぬらしい。なぜなら、犬は丸めた身をやや解いてくつろぎ、その舌でぺろぺろ後肢の傷口を舐め始めた。

その物静かで無心な動作に、なんだか私は多少の畏敬の念を覚えた。

傷口周辺に膿は見えず、通常健康な肉組織に見る、独得の明るい桃色なので、先ずは一安心した。

やがて老犬は顔をむっくり上げ、密生した房毛の間から、じっと私の方を窺った。長いむく毛の眉（横長の眉の形だった）が、庇状に上から垂れて両目をおおい、瞳を隠すほどだ。私の正体を鼻で嗅ぎ取っているのかも知れない。

多分さっきから私の手や体からは、午前の、のど弛緩用の麻酔薬やゴム手袋や内視鏡室の匂いがしたことだろう。だから私もじっと老犬を見返した。

若い頃は、象牙色の毛並に艶があって美しい犬だったはずだ。

< 6 >

今は栄養失調のせいか、総身の毛がゴワゴワ千々に縮れて、強張ったような感じの躰じゅうから何とも言えぬ、ムツと鼻をつく異臭が漂う。どうやら異臭の元は、おもにその耳疾であるらしいのである。

やや茶色い分泌物で、毛先が黒く濡れた長い垂れ耳を、この犬は頭ごと左右にねじるようにして何度も痙攣的にブルッ、ブルッと揺すなのだ。

その痛々しい動作から推して、この犬の耳は皮膚病だけでなく、外耳炎を併発しているかも知れなかった。最も敏感な耳に、炎症を起こした犬はまことに哀れだ。ほとんど犬自身が為せることは何もなく、唯一、飼い主の辛抱づよい熱意と地道な治療でしか治せないのだ。

もし、これが迷い犬であって、元の飼い主が捜しに来てくれれば良いのだが、現実には望み薄だろう。

病んで衰弱した飼い犬を、自己都合で見限り、無責任に捨てた恐れが十分に

ある。いわゆる公園は、ある種の人々によっては、不都合なペットの格好な捨て場なのだ。さっき家内が偶然見つけたのは、その内の一匹であるに過ぎない。あの北公園には、『犬猫を捨てないでください』と訴える看板がある。

その絵看板を見るたびに私は悲しい。

ところで現実を見れば、この犬に今すぐに必要な手立てとは、足の傷の手当よりもむしろ衰弱した体力の回復が優先だろう。この犬は、自身の舌でけなげに傷口を舐めて腐敗を防止できるが、極限までさし迫った飢えを満たすことの方は絶対に不可能だ。

だから私は先ず、洗面器に水を張り、鼻先に置いてやる。

老犬は人間なみの、六カ月ゼロ歳児のように胸から上だけで起き直り、水を一嗅ぎして舌を伸ばし少しずつペチャペチャ舐めた。喉は渴いているようだが衰弱のせいあまり熱心ではない。

次に、仔犬用のドッグフードの缶詰から半分だけ出し、別の容器で与えてみた。すると俄然、犬は胴震いして立ち上がり、鼻先を突っ込んでガツガツ食らいだした。その急激な変化に驚いたが、私は嬉しかった。

犬はむさぼるのを急ぐあまり何度か喉に引っかけゲフッゲフッと噎せた。

< 7 >

激しい飢えの後で、急な過食がよくないのは人間も犬も当然のことだ。

そこで私は固形食の給餌を一旦とめた。いま空腹な犬に、おあずけは大いに不満だっただろうが、彼のためだからしばらく容器を遠ざけて、痩せた犬の腹がそこそこに落ち着くのを待つ。

少ししてから冷蔵庫の牛乳を適度に温めてきて、与えてみた。果たして老犬はホットミルクを見下ろし、ゆっくり味わう感じにピチャピチャと舐め始めた。その舌の叩く静かな音がこの犬のもつ生命のかすかな鼓動かと思えた。

容器の底まできれいにすっかり舐め終わると、痩せさらばえた犬は再び前肢を折って横たわり、背中を丸めた。頭をもたげてじっと私を見上げるが、お互いに言葉は通じず、今この犬が何を思っているか私には解らない。

さて、我が医院の玄関脇から家族の居住区にまで至る間は、ギザギザの飛び石設計である。地面に横たわる痩せ犬には、肋骨に当る石の段差がいささか辛いかも知れない。

そこで、車の霜除け用の古毛布をもってきて置いてやると、老犬は何度もその匂いを嗅ぎ、落ち着かなげに口で引っ張ったりしていたが、やがて半分乗っかるような半分ずれ落ちるような格好でもって毛布の上に丸まった。

犬は目をつむったが、乱れた早い呼吸で腹がせわしく波打ち、背中にピクンピクンと痙攣の波が走り、じきに再び目が開くのだった。

それにしても、また思わぬ散財の元が現れたものだ。我が家にいるペットは、すでに犬が四匹、猫が一匹、水槽の金魚類、リクガメの軍団が十三匹。ついでに言えば、父親のペット好きにはつねに辟易して、大田区大森の下宿先から医大に学ぶ長男、そして明朗活発で一浪中の長女がいる。

子供の教育費が、親をおびやかすのは確かで、世間の常識だろうが、さらに我が家ではペットが大方の居場所を占め、世話の手間と餌代が馬鹿にならない。もっとも飼ったのは皆、私の選択で私の責任である。

< 8 >

多少なりとも腹がくちた老犬は、震えながらも本式に眠りだした。

浅く早く、頼りないその寝息は、活力の失せた人間の老耄状態とほぼ変わらない。苦しげな寝息を聞くにつけこの犬の余命短さを思い、内心、最期まで看取る覚悟だけはしておこうと思った。

とりあえず、清掃用の古モップみたいなよれよれの外観から、この犬を「モップ」と呼ぶことにした。とりもなおさず生き物に名前を付けるのは情が移ったことに他ならない。

そうこうするうち午後一時過ぎになって、高砂町のSさん宅より依頼の電話があった。私は車ではなく自転車で往診に出た。

この辺り一帯は密集する住宅の間の道幅が狭くて、しばしば往診の駐車余地も無いし、時には嫌がらせを受けることもある。

Sさんは肺気腫で、在宅酸素療法を続けている年配の婦人だが、話によると昨日室内で転倒した際に腰を打って痛み、今日はもう動けないとのこと。聞けば、本人は東部地域病院に入院したいとの要望だった。私からは、救急疾患以外は受け入れてもらえない其処の現状を説明し、よければ明日中に何とか入院できる先を探します、と答えた。

入院が必要な患者さんへ、出来る限り妥当な入院先をお世話するのも開業医の務めの一つだ。

往診する町医者は、各家庭医のような存在である。そのためにも地域の病院と密接なつながりが要る。医師単独では人を救えない事例が多いのである。

実はこの近場にもう一人、高齢の衰弱した身に、やっかいな疥癬の併発で、入院先の受け皿が見つからない患者さんがいる。

私は先週、高砂訪問看護センターの熱心な職員から、その件で相談を受けた。そちらの患者のほうで、治療の手間が大変な割に大した保険点数にならない症例だから、何かと厳しい現実もあって、私から幾つかの病院にツテで問い合わせている最中だった。

< 9 >

医療界の置かれた全体の状況を考えると、今後の日本に、福祉の篤い展望は無さそうだ。そうと分かっているながら打つ手はなく、あきらめず個々が頑張るしかない。

往診から戻り、出遭い初日の記念にと思い、新米モップの様子を私のライカM5で何枚か撮った。モップは玄関先で毛布に丸まり相変わらず全身で震えていた。だが、再び人家に繋がれた宿命が解るのだろうか、カメラのシャッター音にも怯えなかった。

お気に入りの中古カメラで、我が家のペットを主人公にして撮る瞬間が、私には他に比べるものの無い喜びである。

撮影の間に帰宅した家内から、「犬がこの場所のままでは、宅配便や郵便配達の方のじゃまになります」と、きつく注意された。成程、いつも目配り気配りは家内のほうが素早くて正しい。それで私はモップを引いて一時的に他の犬たちや玄関からも遠い、医院の裏側の軒下へと移した。

もはや今の季節は、日によっては放射冷却で生じる未明の寒さに、白い霜が早朝の屋根をうっすらと覆う時候である。老犬はそれを知ってか知らずか、おずおずと移動し、彼の物となった古毛布に再び腹ばった。何分かの間、所得顔の彼は私を見上げた。但し尾を振らず、まだ警戒している。私のする世話など何とも思っていないのだろう。おそらく長いこと放浪していたのだから当たり前だ。これがモップとの出遭い第一日目だった。

ここで、第二日目以後の一週間ばかりの日々に、老犬モップの身の上にした変化を、少し箇条書的に記しておこう。

先ず翌月曜日は夕刻から暴風雨となった。モップを再び診療所の玄関下へ戻して雨に濡れないようにしたが、犬が昨日よりもぐったりした様子が気になる。夜寝る前に私は落ち着かず、長女が夕食に食べ残した牛肉を細かく刻んで持っていった。

< 10 >

すると驚いたことに、死んだように身じろぎ一つせず、縮こまっていたモップが食器を置いてやった途端、ガバッと起き上がり、肉片をむしゃむしゃと食べ始めたから、気ぜわしいその健啖さに改めて目を奪われた。

モップの反応が一瞬もためらわなかったのは、私のとる行動を、彼が逐一耳を澄ませて聴き取っていた為だろうか。待ち受けていたような老犬の素早い反応、それが何とも不思議に思えた。

弱っている筈の老犬の見せたこの矛盾行動について、「衰弱した振りをしていただけなのかなァ？」と、常日頃から冷静な家内に相談してみた。

そんな心細い夫に代わり、家内がペット美容院と動物病院を予約してくれて火曜日に彼女がモップを連れていった。家内には幾つか質問を、言伝で頼んでおいた。動物病院の院長が家内の従兄弟なのである。

その夜、家内が診断結果を私に話してくれた。

それを要約すると、モップはかなりの高齢犬で、白内障の進行のために視力は殆どゼロに近い。確かにモップの両眼はうっすらと白濁している。

また、気になっていた耳は、両方とも外耳炎で、人間ならば耐えられない重度の皮膚潰瘍を起こしており、これは気長な治療を要するとのこと。モップは頭を振り振り外耳炎のその痛みを耐えているのだが、元々は頑健な体力に恵まれた個体らしい。

後肢の裂傷にもさし迫った腐敗の恐れはなく、自力で治癒するはずだという。また、フィラリア症の心配はないものの、憔悴のせいで極度に心臓が弱っている。つまり心拍の劣化だけはモップが我慢したとしても努力の埒外で、

「この犬の永眠は時間の問題」という結論だった。

この院長はまだ四十代にも届かぬ若手だが、家内の親戚という鼻肩目を除いても、犬の言葉がわかる名医だ。その診察結果を疑えるはずもない。

< 1 1 >

モップは火曜の一晩だけ、その動物クリニックに入院した。そして水曜日の昼休み、ちょうど医院に來合わせていた薬剤メーカーの営業マンに私から車の運転を頼み、家内と三人で迎えに行った。こういう時は気が落ち着かず、第三者に運転を頼むに限る。

奥から出てきたのを見れば、シャンプーを終えたモップは、全身の毛が見違えるほど奇麗で、ハンサムになっていた。

入院用の小部屋から出されたモップは、私の匂いを覚えていたのか、綱をぐいぐい引いてこちらへ近寄ってきた。何といういじらしさだろう。

帰途は、私が膝の上にモップ抱いて車の後部席に座った。骨張った犬は、図体の割にかなり軽かった。但し、帰る途中、ズボンを通してじわりと暖まる湿っぽい浸透感が私の腿に広がった。

「しまった、やられた」私はくぐもる声を上げて嘆息した。

仕方ない、不馴れな車の加速変化と震動に居すくんだモップが失禁したのだ。しかし、と言っていま手を放すと車中、不安がるモップが暴れ出しそうなので、そのまま優しく抱いていたが、股間の居心地悪く、家に着くまでがいやに長かった。助手席にいる家内の後ろ姿は、見れば何と、どうやら笑いの波をこらえているらしかった。

帰宅後も、まだ足腰がふらつき、歩行もよろけていたモップだが、肝腎の食

欲だけは旺盛だった。連日もりもりと食べているうち目に見える如く日毎に体力が回復し、我が家に来てから一週間後には普通の犬並みに歩けるようになった。

彼には、じきにもっと運動量が必要になるだろう。しかし、このまま紐付きで拘束して飼う訳にもいかない。そこで試しに、庭の先住ビーグル犬組（エリックと雑種レイラ）とモップを一緒にしようとしたら、互いに牙を剥き合う騒ぎになった。和合させるのはまだ無理だった。

だから最悪の場合、狭い庭を柵で仕切り直してモップ専用の居住区を追加して放し飼いにしてやらねばなるまい。そうなったらまた痛い出費なのだが。

< 1 2 >

この最初の一週間のあいだに私は、動物病院を通じて警察方面で「探し犬」の届け出を調べてもらった。結果は、モップに該当するような案件は全く無かった。つまり彼の元の飼い主にどんな事情が有ったにせよ、老犬を捨てたのは酷いと思いながらもこれでモップは正式に我が家の一員となったのである。

モップを保護してから十日目のある夕方に、特筆すべき嬉しいことが起きた。それは、モップが初めて彼の方から私の足へ彼の頬をすり寄せてきたのだ。彼からの無言の挨拶である。これは犬と人との間では、一見何げない行為のようだが、ずっと怯えっぱなしでおどおどしていた捨て犬が、ようやく警戒心を解いてくれた兆しなのだった。

何とも言えぬ感激に、私はその場にしゃがみこみ、モップの毛深い頸からしなやかな頭部を何度も私の腕の中に抱きしめ、胴の毛並に沿って撫でてやった。今は難治の外耳炎が臭うのも気にならないのだ。

モップの胴は、私の手の愛撫の移動につれて毛が心地よげにふるふると震えを移した。これこそ、犬が心を開いてふたたび人間に身を任せた証拠だ。痩せて尖った彼の腰周りの骨格に、肉の付いてきたのが私の手にもはっきり分かった。こんな嬉しい新鮮な実感を彼がわたしに与えてくれた。

翌朝六時半、回復期にあるモップの足慣らしとして、一緒に歩む初の運動を試みた。

すでにミニチュア・ダックスフント（シュガーとジョジュ）とモップとの組み合わせならば、相争わぬと判っていたから、皆して高砂北公園まで散歩に行ったのである。むろん三匹は大過なく往復した。ただ三匹の引き紐の絡まるのが面倒なだけだった。

途中、例の紙袋をモップが漁っていた辺りを通ったとき、家内から電話のあった先日の出会いを思い出して私は感慨深かった。もしあのとき家内が動けない負傷犬を、そのまま見過ごしていたら、私は再びモップと共にこの場所に来

ることは無かったはず。出会いとは不思議だ。

< 1 3 >

その初の散歩の途中だったが、モップは片足を高く上げて電信柱の一本一本に向けて雄犬らしく欠け尿を飛ばした。彼の縄張り宣言である。つい昨日までは足弱で、姿勢に溜めが無かったため、おっかなびつくりの落とし腰で、まるで雌犬のようにその尻を地面に付けて排尿していた。

それがどうだろう、今は全くの嘘みたいに元気だった。回復したモップは散歩が大好きで、毎朝三匹連れという日課が始まったのである。

また、このころ私は新入りのモップと庭の先住組（エリック、レイラ）の融和策を考える内に、一石二鳥のアイデアを得た。即ち当面、お互いに慣れるまでの間、彼ら三頭と同じ区域（犬舎を含む）を昼と夜の二交替で、別々に共用させるのだ。

つまり、庭の先住組二頭を日中だけ犬舎で遊ばせたら、その夜間は当診療所の二階の一室でリクガメ軍団と一緒にする。一方、モップの方は夜間だけ前記の庭の犬舎に入れて、自由に運動させ、次の昼は玄関付近に繋いで健康回復に日光浴をさせる。

この案は絶妙に思えた。犬たちにとってちっとも差し障りがないのだし。

ただ私にとっては、彼らを動かす毎回の世話が少し面倒だが、当の犬どうしは至近距離の接触をせぬまま、うまくいけばお互いの匂いにも自然に馴染むのでは、と融合が大いに期待できた。この狙いがうまく当たれば、私の出費も無くて済む。

で、実際にその交替番を行なってみると、すんなり彼らは昼夜ごとの住所移動や犬舎の兼用を嫌う風も無かった。さて同じ犬舎に、彼らが夜と昼と別々ながら二週間近く過ごしたある日、すでに犬はお互いの匂いに充分慣れたことだろう、今や融和の機が満ちたのを私は感じた。

即ち、師走十二月の第一土曜日が来るのが待ち遠しかった。土曜は午前中のみ診療なので、終了直後に昼食をそこそこに済ませて家内に手伝ってもらい、いよいよモップと、庭の先住組との顔合わせを兼ねた合同散歩訓練の案件を実行に移すことにした。

< 1 4 >

その当日、雑種の雌犬で手のかからない利発なレイラの「手引き役をよろしく」と家内に頼んだ。もちろん家内は一つ返事でうなずいてピンクの上下トレーナーに赤いスニーカーを履き、レイラ担当を承知した。

そしてこの発案者の私は、犬の雄同士のことだから万が一がみ合いになるや

も知れぬから、モップとエリックの二頭の間を、コントロールする手筈である。私は上野のアメ横で手に入れた米軍放出品の迷彩服に着替えた。もちろん靴もそれなりの準備である。指揮官として私の気分は上々だった。

さて、夫婦一組と犬三匹とは一蓮托生のような形で、我が医院の前の狭い市道に出て歩き出した。朝早く、人通りは少ないので安心な時間帯だ。だが、その結果は、わずか数十メートルの行進だけで入り乱れた。

なんと突如、モップの側が先制攻撃を仕掛けたのだ。朝のこの同道を、最初から当惑げにしていた雄犬エリックに対して、その脇からモップが猛然と襲いかかったのである。老犬とは思えない激しさだった。

一瞬後に、若いエリックも反撃に転じた。二匹の雄犬の争い方は、相互に大きな牙をカチカチと打ち鳴らし、肩や胴で押し込んで敵の隙を見つけようとして競り合い、半立ちになっては、上から相手を圧倒しようとする。凄まじい乱闘は収拾がつかなくなった。

仲睦まじい散歩訓練どころではなかった。幸い、鋭い牙でお互いを引き裂く流血の事態に至る前に、私と家内してやっとのこと、二匹を引き離した。

見れば、先制攻撃をかけたモップの方がゼイゼイ苦しげに喘ぎ、その場に伏して動けなくなった。つい先日まで衰弱の極みにあった老犬の実力なのである。モップは息が切れ、長い舌がのびてぐったりと外へ飛び出てしまい、身が震えるので、私と家内はもしや急性心不全の発症かとあわてたほどだ。

一方、雌犬のレイラは最初からこの闘争に加わらず、ただおろおろした目付きで一部始終を眺めていた。雄の勝者に従うという雌の習性だろうか。

< 15 >

私は、個々の犬が一団の群れの中で、各自で優劣の順位付けをして集団行動をとるといふ犬族の掟を、いちおう知識では知っていたが、いざ実際にその場面を眼前にしてみると大変な熾烈さだ。回復後まだ間もない老犬モップにしてあの若盛りの雄犬へと、無茶な戦闘を挑む衝動が内包されている。

というような訳で、以後の私は、もう迷わず、庭の先住組二匹とモップとを隔離して飼う方針に切り換えることにした。

彼らの無益な衝突をさける為だ。なんとしてもそれは避けてやりたい。

体力がないにもかかわらず、プライドだけで相手に攻撃を仕掛ける無茶な老犬に、これ以上無駄に寿命を縮めてほしくない。

モップが単なる臆病犬でないことを証明した一事だけで充分である。せつかく我が家に来てくれて、ほぼ視力が無いのに、私と家内とだけは判別出来るようになった犬だ。

私とはいえば、狭い庭を新たに柵で仕切り直して、モップ専用の居住区を設

ける案を家内に話して、さいわい彼女の賛同を得た。なぜなら、季節ごとの花咲く庭の美観は、半分は家内の手入れによる賜物である。

そうと決まればモップの新犬舎は私がいろいろ考えてネット通販で選んだ。

また、その庭の準備が整うまで私は、中途半端なモップの存在が、ほかの誰の迷惑にもならぬ場所で飼うことにした。それには、診療所二階南側の屋上に張り出た、一日中日当たりの良い静かなテラスが好都合で、その広さは五メートル四方ほどあり、不要な涼み台や鉢植えが少々置いてあるだけだ。

私は、階段の昇り降りの苦手らしいモップを、手で抱えて運び上げた。今や少しずつ体重が戻ってすでに二十キロを越した中型犬は、いつか動物病院から車で連れ帰った当初に比べて、両腕に重るものだった。

テラスに出たらモップは、景色や匂いの一変した環境に戸惑い、つぶらな眼で辺りをきょろきょろ見回した。でも視力は微弱なはずで、暫くしてもう慣れたのか床に腹ばい、暖かな日溜まりでうつらうつらと居眠りを始めた。

< 16 >

雨の日とか夜間は、モップをこのテラスから家の中に入れて二階の廊下で寝かせるようにした。

かつてこの二階は、有床の部屋が廊下に沿って並び入院対応の施設だったが、時代状況が変わってしまい、当医院は外来専門となって、今はみな空室だ。代わりに当医院のコンピューター機器、臨時の点滴室、娘の勉強部屋、それに私のペットの冬眠用や飼育室としても使っている。

ついでに言うと、この十二月は、例の動物クリニックの院長から今年生れの可愛い兎を一羽頂いた月でもあった。こしらえた飼育場所は医院の二階である。或る休日、下宿先から戻った長男へ新たなペットの兎が増えたのを私が自慢すると彼は「あっ？」と一度言ったきり帰っていったがショックであつたらしい。その声が忘れられない。

将来の外科医を目指す息子は、いま自分の勉学修業だけで精一杯、たまに我が家へ帰るたびに増えている父親の、ペットの亀軍団や兎にまで気が回らぬらしい。それでいいのだ。若い時分は大抵皆そうだ。

さて、暖かな日溜りのテラスの一角に、陸亀や新顔の兎の入った網籠を、日光浴に出したとしても、モップの方では小動物に無関心、知らん顔である。

何とモップはすぐそばを可愛い兎がぴょんぴょん飛び跳ねても馬耳東風だ。テラスでは彼を紐で拘束するのも止めたからモップは自由に日向ぼっこをしたり、植木を嗅いでそのそ歩き回ったりと自分の好きに過ごしている。

その当時からだ、モップは何か私に無視されたと自身で感じると、吠えて私の気を引こうとするようになった。昼休み、私が庭のエリック達の世話をし

ながら、ポリタライの湯でモップの汚れ毛布を揉み洗いしていると、テラス上からモップが野太くウォンと吠える。下の庭で私のあくせく働く様が物音で分かるのだろう。

< 17 >

そんな後で私がテラスへ上がって行ってやると、太い尾をゆらゆら振って身をすり寄せてくる。吠えたのは自分のことを忘れずに構って欲しいという意思表示だ。但し、このモップは今まで私の飼った犬の中では滅多に吠えぬ珍しい一匹であった。

たとえば早朝、私が新聞を取りにがさごそ起き出す時、モップは一回だけウォンと吠える。これは彼から散歩の催促だ。だから、ひどい二日酔いの朝でも犬の散歩はさぼれない。モップが大股の早足で歩き出したがるのを、ミニチュアダックス二匹のちょこまかと遅い足取りに合わせて引き紐で抑えつつ、二日酔いの吐き気をこらえて出発。

途中、汗が出て良い運動になり家に戻る頃は新鮮な空腹を覚える。そして散歩を終えたモップの吠える、次のウォン一回は、私へ食事の催促だ。

かくいう私も、ちょうど宿酔いが薄れて家内にお粥を作ってもらう次第。それ以外は終日、全く吠えぬから近所迷惑にもならぬし、ま、番犬の働きも期待できないが、吠える場合は必ず私への意志表示だ。そばに来てよ、散歩しようよ、腹が空いたよ、撫でてよ、など犬の要望の最低限だが、そうなると一層この犬の持ち味に情が移った。

それ以外は吠えもしないでいるモップだが、よく毛布を汚すので、十日に一度の割で毛布を洗いテラスの手摺に干した。

放浪時の栄養失調による衰弱の余波か、それとも老衰のためか、モップは排泄のコントロールがうまく利かないのである。十二月なのに暖冬であったのが大助かりだった。

昼間に洗濯した毛布が夕方までには乾き、再び老犬に敷いてやれるのが有り難い。モップは乾いたふかふかの古毛布に乗ると、気に入った位置が決まるまで何度も足を踏みかえ、ここちよい寝相を選んでいる。

そのころから私は週日の晩、地域の医師会主催の研修に出席して夜遅く帰宅する際にも必ずモップの寝姿を覗くようになった。

< 18 >

夜半、二階の廊下の隅で古毛布に丸くなって熟睡している彼の様子を見ると一安心する。昔の飼い主の元で、楽しかっただろう日々を夢路に追ってくれていたらと願うばかりだ。

犬だって記憶が有るのだから、きっといろいろな夢を見る。ぐっすり眠りながらモップがキューンと一声低く、短く、切なく鳴く夜もあった。

この年は、十二月三十日の最終土曜日が医院の仕事納めであった。午前で今年の診療を無事に終わり、皆で院内の清掃を一通り済ませたら、午後一時から近所の青砥庵にて恒例の食事会だ。家内を含むささやかな十数名の医療スタッフが一堂に会して心強い限り。まずは家内の挨拶の後、婦長の音頭でもって此の一年の精勤と健康に感謝して皆で乾杯。明年の診療初めは六日である。

少子化の影響もあって小児科の我が医院は、恐らく今年度は初めての赤字転落だろう。医療スタッフを減らせば数字の辻褄は合うが、そんな真似はしたくない。私はじきに酩酊してしまったようだ。

後で聞けば、「来年こそ〇子ちゃんに素晴らしいお婿さんを見つけるぞ！」と何度も叫んだとのこと。〇子ちゃんは当医院にいる極めて気立ての優しい看護婦だ。ぜひ実現しなければ。

翌大晦日の朝、私はまだ暗い六時起きで動物の世話を一通りやり終えて、七時より家の庭を仕切り直す作業に取りかかった。

ここ何週間か頭の中でその構想を練ってきたのだ。ガーデニング用の垣材と竹とを組み合せ、それを細綱で編み上げるという寸法だ。予想より少し材料が足りなかったが、その分は診療所前の植込みから熱帯産の立木を数本切ってきて補うと、我ながらなかなか小奇麗な出来ばえの柵囲いが順調に仕上がる。

私は、朝食の用意をしている家内を呼んで、大得意で出来上がりを見せ、仕事の手際を褒めてもらった。

< 19 >

家内の賛同を得て、良い気分になったところで、新住人のモップを仮住まいから降ろしてきた。ちょうど四週間を二階のテラスで不自由させてしまったことになる。コンクリート敷きの床に犬がどんなストレスを持つか、多分ひどいものだったろう。

で、私の苦心した設計の彼の新居に、当の老犬がどう反応したかと言うと、何でもマイペースのモップは、むしろ迷惑げで落ち着かない風に、うろうろ歩き回った。しかし、その反応も無理はない。

なぜなら、我が家に来てから二カ月経つこの方というものは、はんぱな玄関前、さむい日陰の軒下、なれない共用犬舎、地面のない二階のテラス及び息の詰まりそうな廊下などと、居候の場所が、あちこち転々としたのだ。従順な犬なりに、その訳が解らなかったのに違いない。

しかし今度こそ、せまい庭の片隅だが当人の好きなだけ駆け回れる運動場ができた。宝捜しで地面を掘り返そうが、穴の底に鼻を突っ込もうが、彼の自適

になる場所である。家内が洗濯物を干す縁先とごく近いが、彼女の邪魔にならぬよう間仕切りもちゃんと作った。

あらためて今思い返せば、この新年の初めに続く二月、三月にかけての頃が、モップの最も元気旺盛な時期であった。彼のベスト時の体重は二十五キロ付近まで増えた。

嘗ては肋骨が表面にゴツゴツと浮き出るほど痩せた背中を、貧相に丸めていた犬が、次第に全体がふっくらとして来て、いわば見事に外観の均整がとれた。そして彼本来の性質と思われる飄飄として柔和な顔つきになった。

たとえ犬だって、その時の状況によって良い顔つきを獲得できる。

折々に私がペットたちを撮った下手な写真中にも、モップの著しい変貌が窺える。公園で拾ってきた当日の写真と比べれば、それは一目瞭然だ。やや白濁した彼の両眼が私の接写カメラを向いて笑み、その瞳の底には輝点を湛える表情が誇り高くて、万事を見通すかのようにきらきらしている一枚もある。

< 20 >

いわば写真の其処にあるのは、一度見れば印象的で心にふかく残り、忘れられない犬の顔だった。それは長年の風雪に耐えたような、人間の老人の、枯れていながら毅然とした、うつくしい表情に似通うものだ。

但し、そんな身勝手な思い入れは飼い主に共通の弊だと解っている。しかし、そのような感情を経ずして、どうして動物を飼えるだろうか。

真冬の毎朝早く、高砂北公園まで往復する二〇分ほどの短い散歩が私とモップの楽しい日課だった。散歩に出るのが大好きなモップだったが、いかんせん老犬だけに歩速がのろい。そうは言っても、一緒のミニチュアダックス二匹にとっては駆け足になってしまう速さなので、モップの取る我関せずのペースを、度々抑えねばならず、複数のペットを飼う苦労は様々だ。

実は、この新年初頭から私はこりもせず、次の半年で体重十キロ減の目標に再度挑戦していた。

だから週日、午後三時までの医院の昼休みに、往診が終われば、時には高砂駅前写真館まで少し遠い距離をモップと一緒に歩く日もあった。

モップにとっては朝の分と合わせて二回目の散歩である。その途上に、なかなか遮断機の上がらぬ京成線の踏切がある。電車の通過を待つ間、身を切る寒風が吹く中、傍に並んでしゃがんでモップを抱きしめていると、モップのふかふかした房毛越しに、彼の暖かな体温とトック、トックと刻む彼の心臓の鼓動が親身な存在で伝わってきた。

人間の私は、今いる踏切のこの場所が何処かを正確に知っている。だがモップは知り得ない。それでいながら彼は疑いもせず嬉々として散歩に従い、ゴウ

ゴウと鳴る電車の通過音を聴いている。

つい愛しくなって私が抱擁の力を少し強めると、モップの方は困った風でありながらも、濡れた冷たい鼻先を近寄せてフンフンと私の喉元や耳を嗅ぐ。私の身勝手な衝動に対して優しく的確に応える鼻のタッチなのだ。

< 2 1 >

しばしば思うに、およそ人間が自他に対して抱く愛憎の度合いには、そこに必ず利己上のランク付けが滑り込むが、動物の反応は、全く純粹であり、ON/OFF どちらかの二者択一しか無い。それが良いか悪いかは別にして、動物というものは、何らかの摂理でそう創られている。

能力の単純未開というものとは、多分、まったく違う次元に思える。

ようやく遮断機のあがった長い踏切を、向こうへと渡りながら私は、目の下に幾本もある線路をモップがどう見ているだろうか、とつい思ってしまう。そんな余計事を思う私が、変なのだろうか。でも、犬は太古から人に付き添って常にあたらしい生き方を学習してきたはずだ。そうでなければ、種はとつくに滅びている。生き残ったからこそ犬は鋭敏だ。

たとえば交差点で信号待ちの際、モップはそう躡けた覚えが無いのに、自分から私のすぐ真横にお坐りの姿勢をとる。そして、信号が変わるまで辛抱強く待ち、私の第一歩と共に彼も自然に歩き出す。不思議だ。

もしや元の飼い主に仕込まれたのだろうか、単にそれ以外に、彼の以前の暮らしぶりを窺うすべもないが、またある日偶然に、チーズがモップの大好物である事は分かった。犬はみなチーズ好きと言う人もいる。しかし、そんな些事は、この犬のほんしつを知るのに何の判断材料にもならない。

犬は、というか、人の傍らにいてくれるペットの存在は、たとえ迷子を拾ってきたという最初の出発からであっても、かれらは人を十分に慰撫する大任を果たす。なぜなら人間は知能の発達により、好んで互いを殺し合い、同時に、心から何らかの形で友を欲しがっている。ペットの持つ過去は問わなくていいのだ。かれらは人の傍らに一生添える抜群の能力がある。

モップは、何時の間にかすっかり我が家の犬らしくなった。家内に三度ほどシャンプーに連れていってもらい、今では家内を見るや、庭の隅からトコトコ彼女のもとへ駆け寄るのである。洗濯ものを陽光に干す家内を、モップは尻尾をパタパタと振って見守っている。

< 2 2 >

余談だが、飼い始めてから我が家での彼の呼び名は「モップ」に続き「ご隠居さん」、そして晩年の天才科学者にその風貌がよく似ていることから「アイン

シュタイン」と三つ目が増えた。犬自身は何と呼ばれようが一向平気で、呼べば、自分からゆっくり近づいてきて甘え、こだわる風もない。

家内の大いに感心するとおり、みじめな捨て犬だったとは到底思えぬモップの従順さだ。きっと、家内や娘の目から見たら、しばしば泥酔して失態を演ずる事の多い私よりも、彼の方がより信任が厚いのではないか。

一月の下旬、暖冬のはずが急に冷え込んだ際、珍しく東京に二度積もった大雪の日にも、モップは元気だった。

音も無く雪が降り出すと、辺りはきゆうに暗く、自然に患者さんの足が遠のいて、もはや私は手隙になるから、普段やりきれていない金魚の水槽を掃除したり、長靴姿で前庭や街路の雪掻きをしたり、あるいはボタ雪の精みたいになったモップの歩き回る様子を、積雪の中で撮ったりした。

そのようにモップは一見至極元気であったが、彼が失禁で汚した毛布洗いは相変わらず続いていた。二月の中旬頃だったか、以前から私が注文しておいたモップ用の犬舎がようやく配達されて来た。

私がさっそく荷を解いて組立てに掛かったら、これを一目見た家内からきついクレームがついた。家内いわく、これでは無骨で、いくらなんでも非常識に大きすぎるし、庭の美観を損なうもの、と猛反対され、作業を中断せざるを得なかった。庭は家内の領分でもあるから仕方がない。

家内に言わせると、私には往々にして常識面での欠如指向があるそうだ。でも、ペットの居心地について家族同様に気を配ってやるのが大した罪だとは思えない。あ、但し、これは家内の前では絶対に内緒です。

そういう思わぬ失策もあったが、モップを囲む、季節の巡りや時間は早々と移っていった。

< 2 3 >

春先になって陽気のぬるんだ頃、三月の小雨降る中、モップ達と一緒に公園の隅で、鮮やかなタンポポの黄花を今年初めて見つけた。

タンポポが咲き揃えばその花を摘んで帰り、リクガメや兎に与える。みずみずしい新鮮な餌に彼等は大喜びだ。三月末は一日じゅう曇りが降りしきり、ピンク色に咲いた桜を冷たく濡らした。その数日後、「北公園の桜が散り始めた」と入学式帰りの長女が言った。娘は志望の大学に受かったのである。

桜の見納めにと、家内や娘と一緒に北公園へお花見に行き、桜吹雪の降る下でモップとシュガーとジョジョの三匹が並んで坐るのを撮影した。娘が、紅いリボンを頭に結んでやったシュガーは、来る四月の三旬に出産予定のお腹が膨らんで写っている。モップは、華奢なミニチュアダックスフントの姫二人に仕える、無骨な侍従長のようにも見えて滑稽である。

今思えば、モップの何気ない順調ぶりが当時の私に彼の老衰犬である事を半ば忘れさせていた。それをとつじょ打ち破るが如く、モップに乱調の兆しが始まったのは、忘れもしない四月十日だった。

彼が我が家に来てからほぼ五カ月目である。すでに季節は春の盛りで、日々いよいよ過ごしやすく、急な花冷えも去り気温が定まってきた頃だ。その日の朝、モップの歩き方が変に纏れており、一目で尋常でなかった。

だから散歩は近所だけにして、いつもの半分で引き揚げてきた。モップの変な動きの原因は、彼の後ろ左肢が普通に持ち上がらず、地面へ引き摺り気味となって歩くから、やや斜行してしまうのだった。

また、この朝は急に体力が弱ったのか家に戻ると庭にうずくまり、ぜいぜいと鳴る呼吸音が、いつもより粗かった。

この日を境の如くにして、良否の相定まらなくなった感のあるモップの体調は、間隔を置き一進一退を繰り返した。

< 24 >

たとえばその二日後、モップは失禁で毛が汚れたので送迎車でシャンプーに行ったのだが家に戻った時には、もう自力では車から降りられなかった。

又、歩こうにも足の出し方が不安そうであった。それを見て、そろそろモップと最期のお別れの時が来たかと私は思った。

彼を抱えて二階の一室に運び上げ、毛布に寝かせ、目の前に水とドライフードを置いてやると、モップは腹這いのままかろうじて口にした。それで彼の衰弱の進行度が改めて知れた。

集団の狩猟行動を遺伝的に組込まれている犬は、身を低く伏せて食べる単独性の猫と違い、四肢を踏ん張って一気に食べるのが普通で、そうしないと他の仲間に横取りされるためだ。腹這うモップはそれが出来なくなっていた。

その翌日の早朝、ピチャピチャと音を立てて水を飲む気配で私は目を覚ました。見に行ってみるとモップが四肢で立っていた。自力で少し歩けるようになっていたので再び庭へ戻してやると、ウォンと一鳴き、せがまれて数分間だけ散歩の真似事をしてきた。昼には高砂駅の近所で買ってきた揚げたての香ばしいチキンカツを嗅がせると、尾を振る食欲を示したので、刻んでやったら二枚分を食べた。少し希望の光が見えてきた。

更に四日目は、モップの回復度合がもっとはつきりして、後ろ左肢を引き摺る斜行で苦労しながらも、筋向こうの小学校の塀沿いをぐるりと歩いて一周できた。一昨日の瀕死に近い衰弱ぶりから思えば、大した回復力だ。

一つしかない生命という宝物の発揮する奇蹟を、モップが目の前で私に見せてくれている気がした。ご褒美にチキンカツを与えてみたら、飽きたのかもう

食べない。だが、以前通りに、あても無いが、必死に庭をうろうろ歩き回るのでまだ暫くは安心かと思った。

< 25 >

五日目、私が朝刊を取りに出てみると、夜が明けたての上空は四月半ばの瑞々しさに満ちた濃い董色で、モップがひとり勢いよく庭を走り回っていた。ただし攣った足を引きずったままだ。犬自身には後肢の麻痺が解らないのだろう。人間以外の生き物はそういう風に天から創られている。

例によってモップはウォンと一声だけ吠えて、私に散歩の催促をした。

こうした経過に見る如く、モップは自らの持つ生命力によってどうにか第一回目の危機を脱した。やがて日がたつに連れて、再び彼の食欲が増し、散歩は尚斜行しながらも高砂北公園まで距離を伸ばすようになった。

だが、私の喜んだその回復から二週間も経たぬうち再び四月末にかけてモップは、今度こそ彼とはお別れだという状態にまで陥った。

つまり、最初の乱調の試練に耐えぬいた以降は、ドライフードに牛乳をかけてやると良く食べていたのだが、急に牛乳だけを舐め取る日々が始まり、ついにはその牛乳すら飲み残すようになった。それと並行して彼は日に日に散歩の距離と時間がじょじょに減っていった。

モップは、それでも懲りずに朝の散歩へ出たがる。だが、すぐ息切れがしてしまい途中でへばって歩けなくなる。

無理という理屈の解らぬ犬自身のありさまが、哀れでたまらず私の方が見ていられない。排泄のコントロールも、まだ食欲の有ったうちからしばしば困難で、モップは全体が痩せだした。丁度私の身体の減量が七キロに達した頃と同時期だった。ある日、医師会の総会に出たとき旧知の何人かに、「ずいぶん痩せたね、どこか悪いの？」と問われたから皮肉なものだ。

ところが、モップの生命力は、この二度目の難関をも七日ほどの闘いで時計の振り子が元へ戻るように乗り越えた。

しかし、これ以降は餌を殆ど残す日があるかと思えば翌日は少しだけ食べるという状態でモップの体調からちっとも目が離せなくなった。

< 26 >

そのくせモップ自身は、相変らずウォンと毎朝頑固に吠えては散歩をねだり、肩でハアハア息をしながらも再び北公園まで出歩けるようになった。もちろん、左の後肢が麻痺したままで直進できない不自由な身である。私は毎朝モップの歩調に合わせて歩き、彼がこの世での余生を楽しむひと時を共有した。

すでに高砂北公園では、椋鳥の餌になる桜の小さな丸い実が紅色から黒紫色

に完熟し、風も無いのに自然に落下していた。モップの背中にもその実が落ちて潰れ、点々と毛を黒紫に染めた。頃は五月半ば過ぎで、あたりの木立に吹き出た新緑の萌黄が、目に一番美しい季節である。

我が家では、ダックス犬シュガーの産んだ新生児の四匹が、ちょうど目が開いて乳歯が生え初めた。それで母犬が痛がって授乳を嫌い、仔犬を近づけぬようになったので、私は離乳食を与える試みを始めたところだった。

離乳食づくりはペット雑誌を読んで覚え、私には見よう見まねで初の挑戦である。ミンチした生肉と、半熟の卵黄を混ぜる播り餌から始めたのだが、仔犬たちは案外すんなりと受け入れてくれた。でも、いちいち作るのにすごく手間のかかる贅沢な離乳食だ。

我が家で一番早起き鳥の私は、仔犬の離乳食を準備しながら洗面し、兎、亀、成犬たちの世話で滅法忙しい。金魚の水槽の水を替えて、ハーブと植木に水をやり、そしてモップとジョジュの散歩を終えると、もう七時だが、常に私は寝不足だった。というのも深夜あるいは未明になると、隣室で一斉に鳴き出す仔犬に起こされ、寝惚けながらの離乳食作りの世話が要る。

子育てに疲れた母親犬シュガーは、私の蒲団でうのうと熟睡している。身から錆の道楽とはいえ、私の睡眠が毎晩四時間を切った。これではいくらタフな私でも歳相応に疲れてくる。

< 27 >

私は真剣に睡眠時間確保の方策を考えた。先ず、離乳食は単純にぬるま湯でドライフードをふやかして、そこに粉ミルクをまぶすだけにした。

これは灯台下暗しで、動物クリニックの院長に薦められた方法だが、これなら楽だし一日数回の作業でも苦にならない。そして、離乳食を変更した以後も仔犬たちが皆元気なので安心だった。考えてみると、これは老犬モップの食事内容とまったく同じである。

私は、老犬と仔犬の両方を世話してみて、初めて人間と犬との付き合いが少しはすんと腑に落ちた気がする。太古の昔から幼老両方の犬が、人間生活の中にいたはずで、早くから人と犬とは各々の果たせる持分でもって互助関係を繰り返してきたのだろう。

ところで、例年ならばそろそろ梅雨冷えとなる六月に入ってもこの年は一向に雨が降らず、晴天続きなのも気になった。そして連日三十度をこす程の炎天下、夕刻には少々雷雨となっても翌日はまた早朝から太陽がじりじりと地上を焼き焦がす。

この異常気象のサイクルが、著しく痩せたモップにひどい悪影響を与えはしないかと心配したが、案外彼からせがんで早朝の散歩はするし、牛乳をかけた

ドライフードをよく食べてくれた。そして日中は、ほとんどの時間を日陰で寝て過ごし、時おり、億劫げに立ち上がりハアハア粗い息の頭を垂らして、当てどもなく庭を歩き回るのだった。

ある朝、愛犬と散歩をしていたSさんが北公園でモップを見て話しかけてきた。Sさんは、うちの医院の患者だ。彼の話では狩猟が趣味で家ではセッターを飼っている。彼が猟犬として十五年来可愛がってきた一頭が、いまや老衰でほとんど餌を食べず、排泄もままならないのを自宅看護しているそうだ。しかし猟の仲間には、犬を単なる道具と見なして飼い、役立たなくなれば平気で老犬を山中に置き去りにする人がいるそうであった。

< 28 >

Sさんのその話に、私は溜息が出た。相手がどうなろうと最後まで面倒をみてやるのが飼い主の責任だと私は思うが、現実はそのでない場合が少なくないようだ。去年十一月に保護した時のモップがその実例だったのだから。

纏まった雨の降った覚えのない空梅雨のまま猛暑に突入した七月、ついにモップは逝った。老いた犬には、いや人間にとっても酷すぎる夏だった。

永眠する三日ほど前から彼は全く動けなくなった。努力してハッ、ハッ、ハッと短く、せわしなく、苦しげな浅い呼吸を繰り返すばかりで日陰の地面にくずくまっていた。ドライフードにかけたミルクを舐め残すのは、これが三度目でいっこうに食欲の回復しないのが最も危険な兆候だった。

今回は起き上がる力も失せたらしく、モップは四肢の自由が利かず、試みに私が手を添えてやって、その半身を少しだけ起こしてみても、手を離すとそのままくたたくと地面にくずおれてしまう。その時、私の手に感じたモップの身体は麻酔下にある犬の如くで、意思のない物体としての重量があるだけだった。私が名前を何度か呼んでも、起き上がろうとはしない彼は、もう意識が混濁し反応が薄れていたのか知れない。

モップはこの猛暑なのに一向に水を飲もうとしないのだ。洗面器を彼の口元にあてがって傾けてやり、こぼしながらでも飲ませねばならなかった。犬の皮膚には毛穴が無いから、夏場の体温調節には水をたくさん飲むか、舌からの放熱に頼るしかない。暑さにあえぐモップの長い舌が、やっとのこと動き、ゆっくりとだが水を舐め取るような働きを繰り返した。少しでも水が飲めれば、まだ最後の望みはある。

食欲の不振対策に、彼の好物の生牛肉を細かく刻み、スプーンで口に入れてやってみた。舌が動き、やっとな飲み込んだようだ。するとモップの太い尻尾が力なくもちあがり、かすかにパタリパタリと地面を打った。その尾のリズムが、何とか気力で私に返事をしているかと思えた。

< 29 >

モップは、噛むのも嘔み下すのも自力そのものが弱まっており緩慢で、好物の牛肉もほんの少し食べただけだ。しかし、まだ何とか食べてはくれた。

日中のきびしい暑気を少しでも和らげてやろうと思い、私は仕事の合間を見てはモップの胴体に時々水をかけて冷やしてみた。

彼のつやの失せた毛並の間へ、徐々に浸透する冷たい水の感触をモップは嫌がらず、ただされるがままうずくまっていた。

シャンプーに行ってからまだ日が浅かったが、もう排泄調節がまるで駄目なようなので毛はところどころ既に汚れていた。毛の艶気がしだいに消え失せ、彼を保護した当初の頃のごとく、急にボサついた。

いま、この庭先から彼をどこか他へ移すのは体力の弱った彼にショックを与えるかも知れず、却って危ない気がした。私は寝る前に毎晩モップの呼吸状態を確認し、更に夜中と早朝にも気になって、そっと彼の様子を見にきた。

三度目の峠を、何かの力で奇跡的に乗り越えてくれるのではないかとひたすら願いながらだ。しかし、私のその深い願いもたった数晩のことだった。

最期の日の夜が明けた。

その早朝、モップは相変わらず平べったくうずくまった姿勢のまま、すでに口の中が腫れて表面の白っぽくなった熱い舌で、弱々しくピチャ、ピチャと二度だけ水を舐めた。舌の動きもかなりだるそうに鈍っている。

彼の食べやすいように小さく千切って冷たい牛乳に浸したパンを、口の脇から差し込んでやるとモップは漸く二切れだけ飲み込んだ。それ以上はもう無理なのか、私がいくら与えようとしても厭がって口をそむけた。食べるということの煩わしきでこの老犬を困らせるのが酷である気がしてきた。

前々からマイペースで頑固な犬だが、房毛の奥の円らな目が可愛くて憎めない。私はモップを、人間じみた内面の備わった犬だとは思わない。

< 30 >

その非人間的でありながら人間以上の存在感を備えた、犬らしい彼の動きにモップの個性を観ただけだ。

一方、モップは、非犬的な私の動作を遠くから近くから常に飽きもせず見ていた。生き物と人とが共に住むとはそういう関係なのだろう。

うずくまったままのモップの額と耳の後ろ側を、そっと掻くように撫でてやる。ここは特に喜ぶのだ。彼はその愛撫が微かに分かったようだった。尻尾が再び力無くパタリ、パタリと地面を打ったのである。

それから私の手に彼の大好物のチーズが現れるとその匂いに惹かれたよう

に鼻面を上げた。

モップはせがむように私の手を一度だけそろりと舐めた。それは、まだ辺りの涼しい早朝に、熱気のかたまりのような感じのする舌だった。賽の目に切ったチーズの小さな一切れを口に差し入れてやった。すると、モップは咀嚼したなかなか嚥下できず、その口の動きは舌でチーズを蕩かしている様だった。地面に横たわったままである。

やがて、かすかだった彼の口の動きが止んだ。チーズはもう飲み込んだのか、そのままだったのか、分からない。そしてモップの顎がじょじょに下がって、彼の喉が地面へ平たくついた。いま私が気がつけば、浅くせわしなく上下していた彼の腹壁や、時々力無く振っていた尻尾が、もはや微動だにしなくなっていた。いま、モップは最期の息を引き取ったのだ。一見その姿は、生前と何も変わってはいないのに、である。

小さな羽虫が、朝露の載った葉の上を勢い良く飛んできて庭を往き来し、朝日を反射する細い糸の先に乗る微少な蜘蛛も宙を漂いながらやって来た。彼等には新しいこの一日が始まったばかりだ。羽虫も蜘蛛も、動かぬモップの寝相の上を通過した。彼等には大き過ぎてモップや私の存在が見えないのだ。確認のため、手を当ててみると房毛の奥でモップの心臓の鼓動は絶えていた。

< 3 1 >

しかし、長い房毛の下にある彼の目はまだ開いている。生前のように丸く見開いており、もう瞳は全く動かぬが遠く安らかな目であった。

かつて一度は当てどもなくさ迷った捨て犬モップは、最後はそれなりに不幸でもなく、やすらかに逝ってくれたと思う。

町医者として長年にわたり数多くの臨終の場に立ち会ってきた私自身も、すでに、安らかな最期を迎えたいと願うようになった年齢だ。なにものも生老病死の定めを与えられた限り人も動物も死の手からは逃れられず、だからこそ最後がよければ、それで良いのではないかと思うときがある。

それでも私は、モップの死が現実のものになってみると、前々から頭ではやがて別離の時が来ると解っていながら心が内に籠り、もはや息をせぬモップを見詰めて、ただ黙然と思考が停止した。

悲しみとか哀れみとか、そういう言い表しやすい類の感情ではなく、たったいま目前で起こったなにかに呆然として私は、ただそこに坐っていた。何も見えていなかった。おごそかな感情と言ってもいいかもしれない。

どのぐらいの間そうしていたのか解らない。

急に庭の気温が上がった気がした。私はぎこちなく立って、機械的に歩き出し何回も洗面器に水を満たしてきた。モップの汚れた毛並を濡れタオルで拭い、

脂垢の黒く浮いた耳の内側をきれいに掃除した。いつかまた出逢うからモップ、私を待っていると内心で低く話しかけた。

モップが垂れ耳をブルッと振り、外耳炎の苦痛に健気に耐えていた頃の様子を思い出した。本当に彼はめったに鳴かない犬だった。

生前は、耳に直接触れられるのを嫌がり外耳炎はまだ完治していなかった。でも、今はもうモップがその痛みで夜中に目が覚めたり夢の中で低く呻いたりすることもない。短いこの八カ月間を、我が家で一緒に暮らした老犬はもはや少しも苦しまず、永遠に眠っていた。

その時、気が付けばいつの間にか家内が私の後ろに来ていて、声を立てず静かに泣いていた。さらば、モップ。

原作：甲田正二郎「犬々日記」「亀日記」

掲載紙『医心伝心』より